

称号及び氏名 博士（臨床福祉学） 御前 由美子
学位記番号 甲 第6号
学位授与の日付 平成22年9月15日
学位申請論文名 『 精神障害者の地域生活支援をめぐる研究
ー ソーシャルワークによる就労支援を通じて ー 』

学位論文 審査委員会

主査 委員 教授 太田 義弘
副査 委員 教授 武田 建
副査 委員 教授 橋本 淳

I 学位申請論文の概要

1 はじめに

本学位申請論文は、ジェネラル・ソーシャルワークとして包括・統合的な視野と発想に立脚したソーシャルワーク実践過程研究について一事例を徹底考察することから、利用者の課題解決や自己実現への変容と成長、そこに参画し対応するソーシャルワーカーの科学や専門性を駆使した生活支援方法の意義や効果を実証的に考察したものである。

それは利用者固有の生活コスモスを基点にして、人と環境へと包括・統合的なアプローチを深めたものである。研究の前提から課題の抽出、障害者の就労問題と対応する施策や現実、打開方法としてのソーシャルワークによる就労支援への意義と理論や方法、生活支援ツールを用いたチャレンジなどへの実証的研究によって構成されている。

ソーシャルワーク実践が、技術や技法を意図したものと安易に解釈され、用語は浸透しはじめたものの得体の知れない実体へと霧散しつつある傾向に対して警鐘を鳴らしている。本来ソーシャルワーク実践は、利用者中心の参加と協働の支援活動過程であり、利用者自身と近隣地域への支援はもちろん、就労の機会やサービスの開発から施策の整備などへ連動しなければならない包括・統合的な生活支援活動過程であるとして、その実証から成果や提言を、コンパクトにまとめた意欲的なソーシャルワーク実践論である。

2 本論文の構成と目次

はじめに

I 本研究の焦点

- 1 前提となる問題
- 2 自立概念

- 3 本研究の枠組みと流れ
 - II 精神障害者の就労支援における問題の明確化
 - 1 就労支援施策
 - 2 就労支援方法
 - 3 問題の明確化
 - III ソーシャルワークによる精神障害者就労支援の展開
 - 1 ソーシャルワークの概念
 - 2 生活支援ツール
 - 3 精神障害者就労・生活支援ツールの開発
 - IV ソーシャルワークによる精神障害者就労支援の実証的展開
 - 1 NPO 法人と事例
 - 2 経過の概要（前期）
 - 3 経過の概要（後期）と考察
 - V ソーシャルワークによる精神障害者の就労と生活支援の考察
 - 1 精神障害者就労・生活支援ツールの活用による利用者の変容
 - 2 環境の相互関係による利用者の変容
 - 3 人と環境の相互変容関係を活用した精神障害者の地域生活支援
- おわりに

からなる内容で、一貫した論理的体系によって構成されている。

3 本論文の構成と内容

(1) 本研究の焦点

1章は、本研究の問題意識と研究課題を整理し、理論的枠組みを提示することから、問題と課題、研究仮説、目的、方法についてまとめ、本研究の全体像をフローチャートとして構成している。

前提となる問題について、精神障害者への歴史的偏見や疾病と障害の併存などが、深刻な障碍を惹起し自信や意欲の低下へと連動してきている。一般に就労概念は施策として広くとらえられ、精神障害者に立脚した視点から理解されていない。実際には就労について精神障害者の多くは収入以外のものを重視しているにもかかわらず、現実には就労をその人らしい地域生活を送るための手段ととらえている。

課題として自立概念について、労働政策や社会福祉政策における自立概念の焦点は、経済的自立である。自立概念を整理して社会福祉の理念にもとづく社会的律性を支援するためには、ソーシャルワーク実践が不可欠であると課題を提示している。

本研究の枠組みと流れを、先行研究から自立概念を精査して、価値・知識・方法と方策が乖離することになると指摘し、本研究の枠組みを、エコシステム構想に依拠しながら実

践活動を中心にして、制度・政策をも改善していこうとする包括・統合的かつパラドックスな発想と枠組みを提示している。

本研究の仮説としては、① 精神障害者にとって就労は、人生の鍵をにぎること、② 就労は、人に仕事をあわせる必要があること、③ 就労よる地域生活を通じて地域住民からの理解や協力が得られることと位置づけている。

研究目的としては、① 精神障害者に対する就労支援における問題を明確にすること、② 精神障害者の就労支援にはソーシャルワークによる生活コスモスへの支援が不可欠であること、③ 実証的研究を行い、制度・政策に反映できるソーシャルワークによる精神障害者の地域生活支援方法を提示することを掲げている。

(2) 精神障害者就労支援における問題の明確化

2章では、就労支援施策についての経緯と現実を考察し、そして就労支援方法についての文献研究を行っている。就労支援施策は、一般就労に焦点があてられて施策が策定されているため、国 → 地方自治体 → 支援機関 → 利用者というトップダウン施策の提供になっていることへの問題を指摘している。

就労支援方法では職業リハビリテーションとして、一般就労に向けた個人の能力開発に焦点をあてた評価と訓練が中心となっており、精神障害者の就労には訓練ではなく、人と環境の相互変容関係に着目するとともに、利用者に必要なサービスをつくり出すというボトムアップの発想をもった支援が必要である。そこで、逆説的なソーシャルワークによる精神障害者の就労支援方法を提示することを本研究の課題としている。

(3) ソーシャルワークによる精神障害者就労支援の展開

3章は、ソーシャルワークとしての就労支援を考察するために、ソーシャルワークとエコシステム構想の概念整理を行っている。精神障害者の生活コスモスに関する2種類の先行研究と精神障害者の就労条件に関する文献研究から、就労に焦点をあてた生活コスモスの状況理解へと、生活コスモスを実体に近似した状態でとらえるためにシステム思考に基づく調査研究から構成子を抽出している。そして、ソーシャルワークの実践要素にしたがい生活エコシステムへのマトリックスを作成し、コンピュータ実践支援ツールとしての精神障害者就労・生活支援ツールの開発へと連動させている。

(4) ソーシャルワークによる精神障害者就労支援の実証的展開

4章では、精神障害者の柔軟な就労の場の提供を目指した NPO 法人の設立からはじめ、農産物の生産・販売活動を行うとともに、開発した就労支援ツールを介したソーシャルワーク実践の実証的研究を行っている。事例は、一般就労中に精神疾患を発症し、家族以外とのかかわりをもつことなく自宅で過ごしていた A さん(29歳の男性)についてである。自信や意欲の低下から活動には消極的であった A さんとの出会いを通じて、支援ツールを用いた参加と協働によるアセスメントで、自己特性の発見や役割づくりから、自己実現へと就労によって自信や意欲の向上を目指した変容過程の考察をしている。また、

就労支援活動によってメンバーや地域住民、地域資源ともかかわりをもつようになり、その人らしい生きいきとした生活を送れるようになった参加と協働の生活支援過程が考察されている。このような A さんのアセスメント結果を多様な作図で表記し、数次にわたる A さんの変容状況を、エコシステム過程として質・量・空間・時間という位相関係からまとめて成果を実証している。

(5) ソーシャルワークによる精神障害者の就労と地域生活支援の考察

5章は、結論であるが、実践事例から人に対する支援ツールを用いた支援活動と、環境に対する支援としての NPO 活動について考察している。これらから利用者と環境の相互変容関係について考察し、精神障害者の就労に焦点をあてたソーシャルワークの理論と実践の包括・統合化へのフィードバックを提案している。そして、精神障害者の就労と地域生活についての考察を行っている。

支援ツールを介したソーシャルワーカーとの協働では、まず利用者の自らの生活に対する関心が引き出されることから、その過程を時系列のデータとの比較を行うというフィードバックにより、生活変容への関心や自己理解への実感が形成されて NPO、地域住民、地域資源の相互関係の拡大に関与し波及していく経緯が克明に考察されている。

さらに、生活変容への期待や目標をもつようになることから、それらをフィードフォワードすることにより、利用者自身が課題を発見し、具体的な取り組みを考えるようになっている。このような支援ツール用いた支援活動の意義と成果をまとめている。

環境としての NPO 活動においては、利用者にあわせた手順の工夫や特性を活かした役割づくりによって、利用者とメンバーの協働を可能にし、一方、NPO、地域住民、地域資源の相互関係の拡大へと波及してきている様子が考察されている。

そして、本研究の目的を仮説と照合しながら緻密に考察を重ね結論をまとめている。

II 学位申請論文審査の要旨

1 研究の目的と方法

(1) 研究の大前提にソーシャルワーク実践として徹底した利用者中心の視野と発想に立脚し、精神障害者の抱える固有で実存的な問題と取り巻く環境や施策の問題提起から、現状批判のみならず利用者自身へのアプローチを人と環境というジェネラル・ソーシャルワークに依拠しながら課題を包括・統合的に整理している。

(2) 研究の目的としては、大局的な観点から問題の整理と課題の提起を前提に、徹底した

① 自立概念・支援概念・自己実現概念というソーシャルワークとしての価値意識（実践志向）を追究し、② 先行研究から明確な研究枠組み（実践論理の体系化）を設定して、仮説を提示し具体的目的を明示している。そして、③ 理論と実践の包括・統合化を目指したジェネラル・ソーシャルワークの実証的展開をしており、理論・方法・技術・技法について事例研究という実証方法を通じて利用者の生活支援の意義と方法さらに効果を解明

しようとしたものである。

(3) 研究の方法としては、① 精神障害者の最大の課題を就労ととらえ、そこに仮説を設定して事例に沿った実証過程研究を展開し、② そのアイデアを先行研究のエコシステム構想に求め、③ それを応用した精神障害者就労支援ツールを開発して、仮説を検証する方法を採用している。

2 研究の特徴とオリジナリティ

(1) 考察内容は、十分な推敲のもとに一貫した論旨の展開で構成されている。① 研究の焦点と目的、② 問題の提起と考察、③ 考察への実践理論と枠組み、④ 就労支援の事例考察、⑤ 就労支援ツールを用いた実証とまとめからなる5章で体系的に構成されている。また各章の論旨を3段論法で追究し、それらの各考察内容もまた3段論法による形式で導入から整理と展開さらにまとめと整理されており、明解で説得力のある論述によって構成されている。

(2) 課題考察のため問題事象の整理や焦点については、歳月をかけ丹念に先行研究や資料などから素材を収集・分析し、そこから対応する基礎理論や方法へと発展する論拠を内外の文献から渉猟するとともに、研究内容の構成や理論そのものを実践理論として再整理し、創意と工夫を凝らしたマトリックスとしての作表や抽象的概念のビジュアル化などによって特徴あるものにまとめ、読者の誤解の払拭と共感を深める努力をしている。精神障害者にとって就労支援は、焦眉の急を要する今日的な最大課題である。しかし、その研究動向は、利用者のためにとは称するものの所詮社会的視点に立脚した諸施策の批判や提言が大半である。それに対して本研究は、徹底した利用者観点よりの参加と協働に基づくソーシャルワーク実践を原点にしており、それへの成果を立証し、実践にフィードバックすることであるとの確信に基づいている。そのためにアイデアとしての先行研究であるエコシステム構想に依拠しながらも、独自の視野や発想と固有な実践方法で利用者自身による課題解決への支援にチャレンジし、精神障害者就労の場の開発とともに、かれらが地域生活へと共生できる基盤の開発や方法に多大な成果と貢献をしてきている。

(3) 他方では、文献や資料のみならず独自の調査研究から精神障害者のおかれている現実を代弁するとともに、理論と実際への架け橋をソーシャルワーク実践そのものから再統合化しようとして顕著で固有なチャレンジをしている。それらは、① 就労支援の場としてのNPO法人の設立と運営さらに就労支援プログラムの展開を利用者との参加と協働のもとに推進していること、② 同業者との共同研究活動に参加しながらソーシャルワークの実践的再統合化のために就労支援ツールを開発し、利用者の生活コスモスのビジュアル化を可能にし、利用者中心の就労支援過程を科学的に展開して、就労支援へのコミュニケーション過程を克明に分析し、利用者の実感や自己実現を成就する方法には固有な成果を認めることができる。また、③ 就労支援プログラムを工夫し改良・発展させることによ

って、就労支援と自己実現を通じた利用者の変容や成長する姿を、関係者や近隣の住民さらに関係機関の人びとに実感し体験してもらうことから、精神障害者への偏見の払拭と人間としての再発見を可能にし、就労支援を通じた地域生活復帰への手がかりを得ていることである。

3 研究の評価と今後の課題

(1) 長年精神障害者の地域生活支援問題にボランティアとして、また研究課題として取り組んできており、その抱える問題にかかわってきた経緯から、ソーシャルワーク実践としての生活支援、特に就労支援に焦点を当てるといふ研究の背景には説得力がある。既存の施策や方法という援助者側からの発想ではなく、また利用者を基点にした視野や発想が、理論や原理さらに施策としていくらか強調されても、所詮それは社会的・政策的観点からの指導的・問題解決的な方策の課題である。このような観点に対して、本論文は、パラドックスな発想に立脚し、利用者の生活コスモスからソーシャルワーク実践への参加と協働を、利用者に寄り添う具体的な実践活動として、逆転の発想を方法展開に具現化していることは独創的でありかつ画期的である。

(2) その理念を実現するためには、理論や実際と利用者の現実に対する俯瞰的な視野と実践に具体化できる緻密な実践理論の再構成と枠組み、さらにアイデアとしての構想とが不可欠である。これらの諸課題に正面から向き合い、それぞれに各種の試行をこらした計画でチャレンジしてきている。また、それらは単なる象牙の塔での観念論ではなく、アイデアの実現を可能にする就労支援という実践の場を生み出す活動を、利用者や関係団体さらに近隣地域の住民と分かち合いながら設定し、理論と実践の相克を見事に克服して本論文は構成されている。そして、理論と施策と方法を包括・統合した利用者中心の実践概念に立脚し、就労支援サービスに焦点をおいたソーシャルワーク実践としての地域生活支援活動を展開している。これは、まさにジェネラル・ソーシャルワークの具現化そのものに他ならない。これらのアイデアを就労支援計画の具体化へと可能にしたのも、先に特徴とオリジナリティで指摘してきたエコシステム構想の固有な展開があつてのことである。就労支援ツールの作成と活用を通じたソーシャルワーク実践によって、本論文の圧巻をなす包括・統合的な目的が成就されている。

(3) 以上の評価に対して、最後に今後の学術研究と実践に対する期待を、残された課題として指摘しておきたい。

① 精神障害者問題を生活という視点からソーシャルワーク実践研究としてとらえ直し再構成するという視点を大前提に、就労と生活支援という場面から精神障害者に対する社会福祉サービスを問い直すということは、壮大な課題である。メゾからマクロ・レベルへのフィードバック実践についての課題の重要性はいうまでもないが、これも日常的な実践的チャレンジの蓄積以外に方法はない。実践場面での小さな支援サービスへの工夫が就労

支援施策の改善・整備につながることから、今後のさらなる活動の発展に期待したい。② 本実証研究で考察された事例は、一事例に過ぎず、その客観的効果を評価するためにも、今後の実証研究の蓄積と深化に期待したい。③ また苦心して開発してきた就労支援ツールを、実践場面で有効に活用するためにも、検討を重ね批判に耐えるものへと改良し整備することも一大課題である。④ 政策としての精神障害者に対する就労支援は、一般就労の場に利用者を適応させるということが中心である。本研究とは発想を異にするが、世相を反映した一般就労への支援ツールの応用を期待する声も大きく、その課題へのアプローチも忘れられてはならない。⑤ 大半のソーシャルワーカーは機関に所属し、機関機能として支援サービスを提供している現実から、就労支援を含む地域生活を包括・統合的に支援できる高度専門職ソーシャルワーカーの固有な機能と役割の理解と浸透が大前提である。それらの動向へのチャレンジをつねに意識しながらソーシャルワークの真髄や方法を敷衍したいものである。⑥ 本実証研究の成果を一事例として紹介することから、本構想の施策としての制度化へ向けて地域社会で固有な就労支援や生活支援ができる高度専門職ソーシャルワーカーの輩出と養成にあらゆる機会を通じて協力したいものである。

Ⅲ 学位申請論文審査結果

1 最終試験結果

本審査委員会は、2010（平成22）年6月16日に受理された御前由美子の学位申請論文を査読にもとづき審査してきた。相互に所見の交換と評価の機会をもち、さらに2010（平成22）年8月4日に公聴会を開催し、研究成果の発表と審査委員と参会者による質疑応答およびコメント交換の機会を設け、続いて審査委員による最終口述試験を実施した。これらを通じて研究成果への評価を確認し、必要な能力と専門的学識を立証していると判定した。

2 学位申請論文審査の結果

以上のような学位申請論文の概要と学位申請論文審査の要旨、さらに最終試験結果をふまえて、本学位申請論文は、ソーシャルワーク実践による精神障害者の地域生活と就労支援の課題に、固有なソーシャルワークの生活支援活動の展開につき理論と方法を基礎にして、利用者との参加と協働から自己実現への支援過程研究として新しい道を拓く顕著な成果を残していると判定できる。それは自立した研究者としての能力と専門的学識を有することを十分に立証していると考えられる。

ここに審査委員一同は、学位申請者御前由美子が、自立した研究者として研究内容と関連した領域について十分な学力と専門的学識を有するものと判定する。本学位申請論文の審査および最終試験における学力認定結果とを総合し、博士（臨床福祉学）の学位授与が適当であると認め、審査結果の報告とする。

